

少年音楽家（七）

七、居ておくれ

土曜の晩で民雄がこの農家へ来てから三日目の終りであつた。二階の暑くるしい小さな室で、彼は窓の許にひざまづいて、山から涼しい風でも来るかと待つて居た。階下の玄關のところでは、新右衛門夫婦が此二三日の出来事を話し合つて民雄をどうしたものだろうと相談をしてゐた

「あの子をどうしやうね」と長い沈黙を破つてどう御かみさんが言ひ出した「どうしませう。欲しいつていふ人はないんですか」

「そうさ誰も欲しいといふものはねい」と新右衛門は容赦なく言つてのけた

その言語をきいて、黄ばんだ白地の寝衣姿の民雄は立ち停つた。彼はバイオリンを持つて暑い小室から脱け出して、臺所へ入つて来たところであつた。

東京女高師教授 岡田美津

「あんな途徹もねい育ちかたをした子供を誰が欲しいつていふものか」と新右衛門は猶も語を繼いで「彼奴の話ちやその親父つていふのも、何もしねいでバイオリンを弾いて、年中森中を漂浪いてたんだ。食べるものも著るものも何もなくになると、山の中の村へ買ひに時々出て行つた位なものだ、それだもの、誰が欲しいがツていふものか」。

民雄は臺所の入口で咽び泣きさうになつた。大急ぎで裏口へまはつて、そこから細長い物置きを抜けて納屋の草置場へ行つた……そこは父さんに一番近いやうな氣がするので。

民雄は心配で遺瀨なかつた。誰も自分を欲しがらない。自分の耳に確にその言語が入つたのだから、誤りではない。バイオリンを持つて遠い／＼父さんのゐる國へ行くまでに、暮らさなければならな

長い夜と晝をどうしたものでらう。誰も自分に要はないといふなら、どうしてその長い月日を送つたらいゝだらう。自分のバイオリンが偽りのない、純な、豊かな音色で美しい世界の事をどうして奏でられやう……父さんはそうせよと仰つたのだが。

と思つただけで民雄は悲しくなつて聲を放つて泣き出した。それから、かれはまた父の言つた他の事を思ひ出した。「よく覚えて置いて……御前の望みのものはバイオリンの中にあるんだぞ。弾きさへすればいゝ。すると、山の家の上に見えてゐた廣い廣い空が御前の頭の上に来てくれる。山の森の中に居る御前の仲よしの友達が集つて来てくれる」と、あそつただと叫んで、彼はバイオリンを取上げて弓を絃に觸れた。

表の縁では御内儀さんが次のやうに言つてゐた
「それや孤兒院もあるし、さもなければ養育院……引受つてくれゝばね……でもあら一寸……と急に言ひ止めて

「どこであの子は弾いてゐるんだらう」
新右衛門は耳をそばだてた。

「納屋だらう」

「寢にいつたのに」

「また寢に行くまでのことよ」と新右衛門は怖らしく言ひ放つて、月の照る庭を通つて、納屋へと大跨に歩いていつた。

やつぱり御内儀も跟いて行つた。そしてやつぱり二人で納屋の戸口を入つて、思はず立停つてしまつた、今夜は軽く早いにぎやかなメロデーが階段を傳はつて來ないで、緩い調子の物を思はせるやうな美しい音が、高くなり、強くなつて、しまひに細々と消え入りさうに響いた。戸の傍の夫婦は聴き入つてゐた。

二人の心は昔に歸つてゐた……二人の仲に子供のゐた頃に。その子は嬉々とした笑ひ聲をこの納屋に響き渡らせたり、バイオリンも弾いたのであつた：今のこの子のやうに弾きはしなかつたが、「うちの新助が月夜にたつた一人弾いてゐるとしたらどうだらう」と二人の心に同じ考が浮んだのである。

新助といふ子が出たやうになつたのはバイオリンのためではなかつた。畫家になりたいと言ひ出したからなので。新助は小さい時からどこでも所嫌はず客間の壁でも天鷲絨表紙の寫真帳の飛頁でも、好きな繪を書いたのであつた。十八の時に畫家にな

るつもりだと宣言した。父親は一ケ年の間、頑としてそれを斥けて、木炭も鉛筆も家に入れさせず、食事を睡眠の他には、すこしも暇のないやうにこき使つた。どう／＼新助は出奔してしまつた。

それから十五年経つたが新助は顔を見せない。但し新右衛門の机の中に新助からの手紙が返事も出さずに二通あるのをみると、罪は少なくとも息子にあるのではなかつた。

新右衛門夫婦が納屋の戸口に入つたところに立停つて考へてゐるのは、大人になつた新助、強情ぱりで家出をした悴の事ではなく幼兒の新助なので、可愛い、縮れ髪の子、両親の膝近くで遊んだ子、この納屋でふざけまはり夜になると母の腕に抱かれて眠つてしまつた子の事なのであつた。

御内儀さんが先へ口をきいた……先刻縁で言つた時とは調子が變はつてゐた。

「御前さん」と慄へ聲で呼んで「あの子を寝かしてやりませうよ」

といつて、つか／＼と歩いて階段はしごを登つていつた。新右衛門も跟いていつた。御内儀さんは階段を登りきつて、

「さ民雄、ちいさい子供はもう寝るんですよ。御出で！」

といつた聲は低くて慄を帯びて居た。御内儀さんが、遠くあこがれるやうな痛ましい眼付をする時と同じやうに今の聲は民雄の身にしてみた。そろり／＼と少年は月の光の射すところへ出て來た。その眼はジツと御内儀さんの顔を見詰めて。

「あの……僕を……置きたいんですか」と途切れ途切りに彼は問ふた。

御内儀さんは嗚咽むせびなきいた。眼の前には黄白の寝衣を新助のを一著た細そりとした少年が立つてゐた。

そして黒い物思はしげな眼——新助の眼に似た——で自分を見入つてゐた。御内儀さんの腕は抱きかゝへたくてウヅ／＼した。

彼女は情がせまつて少年をきつく抱き締めて、

「あいよく、私の子にしてね……いつまでも」
と彼女は叫んだ。

民雄は満足に溜息をした。

新右衛門は唇を開いたが、何も言はずに亦それを閉ぢた。彼は妙に當惑したやうな顔をしてドシ／＼階段を降りていつてしまつた。

民雄が牀に入つて餘程して新右衛門は縁端で妻に對つて冷かに、

「御蓮、御前さつき納屋で下らなく感情を起こしてあんな約束をしたが、あれがどんな意味のものだか、解つてるンだらうな。……不氣味なバイオリンの音だの月の光なんかで御前一時氣が變になつたんだ」

「でもあの子が欲しいンだもの、あの子はどうも……あの新助みたやうで」

新右衛門の口元に、きつい筋が出て來たが、その聲はやゝ慄へてゐた。

「新助の事をいつてるンぢやない。二階にゐるあの漂々した、狂氣じみた子供の事をいつてるんだ。

それや仕込めば働くだらうから、まるツきりの損にもなるめい。しかし一人口が殖えるんだ。目下はそれがこたへるからな。あの一件の手形がよ……八月拂ひだせ」

「でも、銀行の預金が大抵それに足りるだけあるツていふぢやないの」と御内儀さんはひどく詫びるやうに言ふ。

「そうだ、併し大抵足りさうだつていふのはたつぷ

り足りるつていふことはちがふ」。

「まだ時がある——二ヶ月以上もあります。八月三十一日までは支拂はないでいゝンだから」

「それは分つてら。だがあの子供だ。御前どうしやうツていふんだ」

「畠でいも、すこし、間に合はないかね」

「合ふかもしれないが、どうだかなど」男は危んでゐる「バイオリンの弓ぢや草取りも出來ないし、畠も、うなへねいな。あいつにや、バイオリンの弓より他に扱へないやうだ」

「教へてやればいゝ——あんなに上手に弾クンだから」と御内儀さんは呟いた。いま迄にこの女が夫に對つて、つよい言語をまして、自分の仕出かした事の辯解のためなどに、使つた例はないのであつた。

新右衛門はちいさく「フム」といつたぎり返事はしないで、起つて戸内へ入つてしまつた。

翌日は日曜日だつた。この農家で日曜日といふと嚴かな窮屈な靜肅なものであつた。新右衛門は血管には昔の清教徒の血が流れてゐて、爲すべき事とかすまじき事とかいふ事については彼はひどく八ヶ釜

しかつたのである。それ故彼は日曜の朝我家から思ひもかけず美しいバイオリンの音が響き出してそれに眼を覺させられて此上もなく驚いた。立腹しながら大急ぎで彼が衣服を著換へてゐる間も、強く、面白く陽氣に、樂の音はあたりに漲り渡つてゐた。新右衛門は血相を變へて廊下を驅け抜けて民雄の室を押し開けた。

「こゝら貴様どうしたんだ」と彼は問ふた。

民雄は嬉々と笑つて、

「あら解らないんですか。音で解るかと思つたのに。僕嬉しくてくしやうがないの。鳥がね、樹の中で

「居て御くれ—居て御くれ」ツて唱つて僕を起こすのです。御日様も山の上へ出て「居て御くれ—居て御くれ」ツていふんです。ちいさな樹枝が僕の御窓を叩いて「居て御くれ—居て御くれ」ツていふんです。ですから僕バイオリンを取り上げてその通りをあなたに話さずにはゐられなかつたのです」
「でも日曜だぞ—神様の日だ」と新右衛門はきびしく辯じた。

民雄は不思議さうな眼をして、たゞ立つてゐた。

「貴様は神様の事も知らねいのか。誰も神様の事を貴様に教へなかつたのか」と男は烈しい調子で吟味を始めた。

「あゝ、神様—え知つてます」と民雄はあり／＼と安心の態をして「神様は蓄を褐色の毛布でくるんで樹の根を……」

「俺は褐色の毛布だの樹の根なんぞの事をいつてるンぢやねい。今日は神様の日だから、そのつもりで聖く暮らさなければいけないんだ」

「聖くですの」

「そうだ。バイオリンを弾いたり、笑つたり、歌つたりしてはならねいぞ」。

「だツて、笑つたり唱つたりするのは善い事で、美しい事なんです」と民雄は眼を大きくして惑ひつつ辯解した。

「時によつてだ」と新右衛門は、しぶ／＼讓歩して「併し神様の日にはいけない」。

「神様が御嫌ひなさる……ツていふ事ですか」
「そうだ」

「あ、そうなの」と民雄は晴やかな顔をして、「そんなら心配はいりませんよ。あなたの神様は異ふン

です。ね。僕のは、一年中何日でも美しいものを御好きなのです」

新右衛門は、暫く黙然としてゐた。彼は生れて始めて答に困つたのである。しまひに彼は、

「もう此話はよさう。では、かうしやう——俺は日曜に貴様がバイオリンを弾くのが厭なんだ。明日まで延ばして御置き」

と言捨て、廊下を歩き去つた。

朝食は此日は特に沈静だつた。一體この家では、食事は賑かなものではなかつたが、此時の位、陰氣なのは始めてだつた。食事がすむとすぐ三十分聖書の朗讀と祈禱とがあるのだつた。新右衛門が、聖書を讀んできかせる間、御内儀さんと平藏とは堅くなつて眞面目に椅子に掛けてゐた。民雄も、眞面目に堅くなつて坐に著いて居やうと思ふのだつたけれど、薔薇の花が頭を振つては、御出で／＼をしてゐるし、樹の中の小鳥が、いらつしやい／＼と誘ひ顔に囀つてゐるのであるから、どうして窮屈にかしこまつて居られやう。殊に先刻の強きかけの歌を弾いて、「居て御くれ」といはれるのがどれ程悦ばしい事だか誰にも彼にも知らせてやりたくて指が自然に

動いて仕方がないのであつた。

併し民雄は静にしてゐた。自分に出来るだけ努めて落付いてゐた。たゞ足がトン／＼拍子を打つのと、思ひ入つた眼が彼方此方へさまよふので、彼の心は新右衛門の讀んでゐる「イスラエル」の子等が荒野に漂浪してゐる話から掛け離れてゐるのが分つた。

祈禱が済むと、家内中教會へ行く支度をするので、一時間ばかり、音を立てずにゴタ／＼してゐる。民雄は教會へ行つた事がなかつた。それで、平藏にどんな風のものかと訊ねた。平藏は、唯肩をすぼめて誰にともなく、

「どうだ、今のをきいたか」と言つたが、これだ民雄に對しての答には一向ならなかつた。

教會へ行くには、きれいに磨き立て、行くのだといふ事が民雄に解つた。彼はこれ程に擦られたり櫛でかゝれたり、ブラシをかけられた事はなかつた。そして民雄にツて白い服と赤いチクタイを御内儀が出してくれた。それを出して、彼女は寢衣の時と同じに、少し泣いた。

教會は村にあつて、ごく近かつた。中へ入つて民雄は大きく眼を開いて興味を覺えながら、中央の通

路を新右衛門夫婦のあとに跟いていつた。時間が早かつたので禮拜式は始まつてゐなかつた。オルガンを弾く人さへも著席してゐなかつた。天井までも達する藍と金の大きなパイプの下に弾く人の席があるのであつた。

このオルガンといふのが村の誇りで、この土地出生の偉い人が寄附したのであつた。そればかりでなく寄附者は、年々相當の金を出して日曜毎に教會から名ある音楽家を聘して弾いてもらふやうに取計つたのである。今日オルガンを弾く人が席に著いてみると新右衛門一家の席に見馴れない子供がゐたのでその子が不思議がつてゐる眼と見合せて微笑してみせた。それからあとはその人はもう音楽の方に氣を取られてしまつてゐた。

新右衛門一家の席にゐて民雄は息を凝らした。彼の耳にはパイオリンが十も二十も合奏されてゐるやうは思はれた。いや名も知らない他の樂器が十も二十も頭の上で鳴り渡つてゐるやうなので彼は有頂天になつて思はず立ち上つた。押し止めやうとするうちに、彼は通路に出てしまつた。……眼は美妙の音の源と思はれる藍と金のパイプを視入つて。それか

ら彼は弾いてゐる人と幾段かの鍵盤とを眺めた。そして足音をぬすんで彼は通路を進んで、階段からオルガンのある所へ登つて行つた。

長い／＼間彼は聴き入つてちつと立つてゐた。やがてオルガンの音が止むで、牧師は祈禱をしやうと立つた。でもきこえて來た聲は、大人のではなく子供の聲で

「あの、どうか、僕にそれを教へてくれませんか」といふのであつた。

オルガンの人は咳をしだした。高音部の唱ひ手が民雄を傍へ引き寄せて何か彼に囁いた。牧師はしばらく度を失つて黙つてゐたが、祈禱にとりかゝつた。新右衛門の席では、怒りきつた男と面目ながつてゐる女とが、民雄をもつと仕込まぬうちは教會へ連れて來まいと心に誓つた。(七終)